

(特研様式5)

所属長印

早稲田大学総長 殿

2008年 5月 28日

所 属 高等学院

資 格 教諭

氏 名 松島 毅

印

## 特 別 研 究 期 間 研 究 成 果 報 告 書

1. 研究課題： 『和泉式部日記』を中心とする前期中古女流日記文学の研究
2. 研究期間： 2007年 4月 1日 ～ 2008年 3月 31日
3. 研究場所(国/都市・機関名)： 日本/東京 早稲田大学など
4. 研究成果概要(2,000字以内)：

私は『和泉式部日記』を中心とする前期中古女流日記文学の研究」と題するテーマを掲げ、昨年度1年間の特別研究期間を許された。これまでも『和泉式部日記』は中心的な研究対象としてきており、折に触れて発表してきた成果は構想論から作品論、そして現代における享受の問題にまで及んでいるが、特に注目し続けてきたのは、本作品の記事相互、あるいは作中和歌とそれを受ける散文部分とが織りなす、真の文脈を明らかにすることであった。本研究はそれらの研究をさらに進め、深めるものとして位置づけられる。それに加えて、本研究においては、『和泉式部日記』を文学史的に新たに位置づける試みも課題としている。『和泉式部日記』は、従来、先行・後発の諸作品との関係をあまり論じられることのない作品であるが、それは、従来の方法論では影響関係を論証しにくいためである。だが、その一方、その視点の設定や主題性・和泉式部の環境などから接点を探れば、先行の女流日記文学作品『蜻蛉日記』との浅からぬ関係が推測されるのである。これもまた、本研究の課題とした。本研究を「前期中古女流日記文学の研究」と題した所以である。

前者つまり『和泉式部日記』自体を課題とした成果として、『和泉式部日記』十月の記事に見える引歌「見ても嘆く」と「塩焼衣」についての考察を挙げる。『和泉式部日記』十月に、恋人「宮(歴史上では冷泉院皇子敦道親王)」が、昼に来訪する記事があり、同居を勧誘された「女(和泉式部と目される)」がそれをためらう言葉の中で「見ても嘆く」の引歌が現れる。従来、この引歌については、『古今集』恋五(よみ人知らず)の「見ても又またも見まくのほしければなるるを人はいとふべらなり」を原歌と想定するのが通説である。だが、引歌にされた形はあまりにも原歌との隔たりがある。つまり技術論的に引歌や何らかの引用と見るには無理があるのであり、その解釈も複雑な過程を要することとなる。一方の引歌「塩焼衣」だが、これは「宮」が「女」の「見ても嘆く」を受けて応えたものであり、通常は、『古今六帖』第五の「いせのあまのしほやき衣なれてこそ人のこひしきこともしらるれ」が原歌とされ、「慣れ親しんでこそ(同居してこそ)愛情はよりまさるのだ」の意で解釈されている。だが、歌語「塩焼衣」を検討すると、これによって表現される内容は、①「馴れ、

※研究終了後2ヶ月以内に提出してください。ワープロ原稿の貼付けも可。なお、学術研究活動情報(学術年鑑 Web)のホームページに掲載しますので、電子メールでも研究支援課まで(tokkenseika@list.waseda.jp)ご提出くださるようご協力をお願いします。

ゆえの間遠を嘆く・②馴れることによって愛情が増す という相反する二つの解釈が可能であり、そのまま原歌を想定できないということになる。そこで、当該表現の再検討を行い、前者については、『斎宮女御集』・『大斎院前の御集』などに源泉を求められる可能性があること、また同時代であるため引歌との認定は難しいが、『重之女集』に見える「なぐさめむかたこそなけれあひみてもあはでもなげく恋のくるしさ」などが発想に類似性を持つことを指摘し、「同居しても嘆きは尽きない」との危惧を「女」が示したのものとした。後者については、当該場面での「宮」の行動と関連させ、「(同居して) 馴れて愛情がなくなるか、よりまさるものか、試して御覧」との意ではないかと考察した。さらに「塩焼衣」の言葉を欠く応永本本文を検討し、現行主流である三条西家本に増補の可能性があることも指摘した。なお、これらについては、2007年12月22日に開催された日記文学研究会第53回大会において、口頭発表を行った。

後者つまり『蜻蛉日記』との関係を考察した成果としては、『蜻蛉日記』・『和泉式部日記』に素材として共通して見られる「不開門」記事の検討を挙げる。「不開門」記事とは、男が妻や恋人を訪れるも門を開けられず、仕方なく帰っていく話柄を指している。『蜻蛉日記』におけるそれは、天曆九年十月の記事であるが、この場面に表れる「なげきつゝひとりぬる夜のあるまはいかにひさしきものとかはしる」の歌は、『拾遺和歌集』や『大鏡』にも重出していることから、これらの記事との比較検討を行った。既に指摘されていることでもあるが、『蜻蛉日記』には、門を開けられないことに対する兼家の抗議が記されていないこと・『大鏡』・『拾遺集』に記されることのない「町小路の女」に関する文脈の中に当該記事が組み込まれていることから、『蜻蛉日記』当該記事が素材を再構成した可能性があること、そのように見るとき、『蜻蛉日記』が道綱母の嘆きを描くことを志向していると考えざるを得ないこと、また現在『蜻蛉日記』が『兼家集』の役割を担って成立した作品であるとする見解があるが、作品の志向性を考えるとそうした見解には慎重であるべきことを結論として得た。一方、『和泉式部日記』において、「不開門」記事は、「宮」が「女」の男性関係に疑いを抱ききっかけとして位置づけられている。当該記事では門を開けられなかった原因は「女」の勤行による疲労で眠り込んでしまったことにあると説明されるのだが、ここには①門番の不在(化)・②「宮」の「女」に対する疑いが場面の構成に対して割り込むような形で叙述される・③「宮」の疑いが歌の贈答にほとんど影響を与えない といった不自然とも思える点があり、本来は「女」の男性関係とは関係なかった出来事の中にあえてそれが持ち込まれ、作品前半の基調を作り出しているのではないかと考えられるのである。つまり、『蜻蛉日記』・『和泉式部日記』両作品は、「不開門」というモチーフをそれぞれの主題性に応じて操作し、再構成を試みていると考えられ、そこに性格を異にするとされる両作品の間に通う水脈を見出しえるのではないかと思われるのである。これらのことについては、2008年秋刊行予定の『日記文学研究 第三集』に論文として投稿し、採用が内定している。